

言語活動の充実をどう図るか

——生徒の作品分析と授業半年後の生徒アンケートから見えてきたこと——

藪田 知子

一 はじめに

平成二十年一月十七日に出された中央教育審議会答申において、「確かな学力」の要素とは、①基礎的・基本的な知識・技能の確実な習得、②知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等、③学習意欲の三つであると明示された。さらに、思考力・判断力・表現力等を育成するために、言語活動の充実は「各教科を貫く重要な改善の視点」であると改めて整理された。これは、知的活動（論理や思考）、さらにコミュニケーションや感性・情緒の基盤という言語の役割をふまえての位置づけである。難波（2007）で「あらゆる言語活動は、「考えること」をくぐり抜けなければならない」とあるように、稿者も考える力（＝思考力）が国語科にとどまらず、あらゆる学びの根幹をなす力だと考えているので、考える力を常に意識しながら各単元の指導事項を押さえたいと考えている。そのような見地から稿者は、考える力をつけるためには、指導者が一方的に授業をしていくスタイル

の授業よりも、生徒が言語活動をしていく方が効果的であるのではないかと考え数年来言語活動を組み込んだ授業を構築してきた。しかし生徒が言語活動をどのように意識して授業を受け、また実際に力が付いたのかを十分検証することなく今日に至っている。生徒は言語活動を充実させた授業の中で、本当に考える力を付けたのか、そうだとすればそのことをどう受けとめているのか、また言語活動をする事自体をどのように受け止めているのであるうか、その検証・考察の場として本論文を位置付けていきたい。

二 生徒・単元について

（一）生徒について

昨年度勤務していた広島市立A中学校は、一学年六〜八クラスの大規模校である。稿者は三年生を担任、七クラスのうち三クラスを担当することになった。前任者の授業は前向きに受ける講義形式であったと生徒の話やノートから伺えた。稿者もなかなか授業研究に打ち込めず、年間通して自分なりに言語活動を工夫したと思える単

元は二単元にとどまった。そう考えてみると、このとき担当した生徒は言語活動をしっかりしながら学んだ経験が少ないまま中学校を終えたのではないかということになる。このことをふまえ、彼(女)たちが言語活動を充実させた授業をどのように受け止めていたのか探っていくこととした。

(2) 単元について

新学習指導要領における「C 読むこと」の中の、「エ 文章を讀んで人間、社会、自然などについて考え、自分の意見をもつこと」、また、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の「A 伝統的な言語文化に関する事項」の(ア)「歴史的背景などに注意して古典を讀み、その世界に親しむこと」を指導するにあたり、本学習材「君待つと——万葉・古今・新古今——」は適した学習材であると考えられる。というのも、本学習材に取り上げられている和歌は十七首、時代、内容も多様であり、自然や人を愛する心、生活の中の折々の感動など、さらに古人と自分を比較することで浮かび上がってくる人間の普遍性について考えることができると思われるからである。加えて、本学習材は「音読を楽しもう 古今和歌集仮名序」を受けて設定してあると考えると、古人の「やまとうた」に対する価値観や敬意にも思いをはせながら学習できるのではないかと考える。ただし、ここまで生徒に考えさせるには、大きな障壁がある。第一に、歴史的仮名遣いや古語に対するアレルギー、第二に和歌の解釈に時間がかかること、さらに授業時数の問題である。特に、和歌の解釈が不十分であると、先に挙げた人間の普遍性にまで

はとうてい考えが及ばないと考える。今回の実践では、この点を克服するために生徒に好きな和歌を選択させ、同様の主題の和歌をつくらせるという言語活動を仕組んだ。というのも、指導者が十七首の和歌について細かく説明しても飽きてくるのは想像に難くないし、何より和歌との距離感が縮まらないと考えたからである。なお、今回設定した言語活動は中央教育審議会答申(平成二十年)で挙げられた「思考力・判断力・表現力等をはぐくむ学習活動の例」として挙げられた六つのうちの「③概念・法則・意図などを解釈し、説明したり活用したりする」活動に当てはまると考えられる。

(3) 学習過程について(次ページ表参照)

三 生徒の考える力を引き出す工夫

(1) 現代風に創作すること

古典を学ぶことの意義の一つは、古典に表された古人の思いを知り、現代の自分と比較し、その共通点相違点を考えること、特に共通点を探る中で人間の普遍性について考えることであると稿者は考えている。これは、これまで関わってきた生徒たちが、古典は現代に生きる自分たちとはかけ離れたもの、遠いものとしてとらえがちであったなかで、現代(人)と古典(古人)の共通点を考えることで古典(古人)に親しみを増し、時代は違っても人間というものは同じようなものだなあという思いを持ち、古典を好きになっていった姿から得たものである。古典の中に描かれている古人の思いをど

2. (3) 学習過程

	主な学習活動	指導上の留意点	評価規準
一 次 1	・全首を音読する。	・歴史的仮名遣いを確認する。 ・リズムの美しさに留意させる。	全首をリズムを大切にしながら音読している。
一 次 2	・和歌の基本的事項について知る。	・三大和歌集の特徴・基本用語について指導する。	和歌の基本的事項について理解している。
一 次 3・4	・プリントに難解語句の意味を書きながら和歌の大意をつかむ。	・歴史的仮名遣いや基本用語なども再度押さえる。 ・作者についても解説を加えて、興味を促す。	和歌の大意をつかんでいる。
二 次 5 (0.5h)	・17首の中から現代風書き換えて創作してみたい和歌を三首選び、理由を書く。	・古今集・新古今集はテーマごとの配列であることを知る。 ・指導者が調整して平均的な人数にする。	・創作してみたい和歌を3首選んで、その理由を書いている。
二 次 6	・現代風にするためにテーマを感じさせる小道具を考えさせる。 ・小道具を元に五・七・五・七・七の和歌を創作する。	・教科書掲載作品の長歌を例にとり、指導者が、創作をした過程を見せて学習活動のイメージをつかませる。 ・筆名（ペンネーム）も考えさせる。	・元の歌のテーマに沿った小道具を用いている。 ・五・七・五・七・七の形式に則り、元の歌のテーマと同様の和歌を創作している。
二 次 7	・仲間の創作した和歌を読み、元の歌を考える。（クイズ 元の歌はどれでしょう） ・元の歌をふまえたうえで、一番よいと思う歌を選び投票する。 ・クイズの答え合わせをする。 ・感想を書く。	・元の歌をふまえたうえでよい歌を選択することを押さえる。 ・クイズの正解は歌を作った本人に発表させる。	・テーマに着目して創作した和歌の元の歌を選択することができている。 ・今も昔も変わらない人間の思い（普遍性）について理解している。
	・ベスト3を発表、表彰する。		

う解釈し、自分たちと比較するか。今回は、新しいことに挑戦したいと考え、「桃尻語訳「枕草子」」や「チョコレート語訳みだれ髪」などをヒントに同じテーマで現代風に書き換え創作していくこととした。この活動をさせることは古人と現代人は共通点があり、同様のテーマで現代人も和歌を創作することができるということが前提となっている。その意味で、人間の普遍性について生徒が納得しやすいついという利点がある。また、言語活動としては和歌を一首創作する、クイズ（創作した和歌の元の歌を探す）、最優秀作品に投票するといった活動なので全体的には時間もそれほどかからないと思われた。さらにもう一つ、有効だったと感じられたことは、テーマを中心に和歌を書きかえる学習なので、稿者も生徒たちもテーマを意識した学習過程になったことである。

(2) 条件（小道具）をつけること

元の歌と同じテーマで現代風の和歌を創作するという条件で生徒に和歌を創作させようとしたが、現代風か否かは判断が難しいと考えた。そこで、条件に身近な「小道具」を和歌の中に詠み込むことを入れた。身近な「小道具」をいれることで、和歌の情景は現代に反転し、同時に生徒自身の思いを詠うものになる。さらに、学力の低い生徒はテーマという抽象的概念と小道具という具体物を関連させることでイメージをつくりやすくし、創作の手立てとなることも考えた。元の歌は小道具は創作という流れをつくったことになる。さらに、五・七・五・七・七の形式という条件も付けた。二次の冒頭では生徒にイメージをつかませるため、十七首の中から生徒が選択

しないであろうと思われる長歌・反歌を選び、次のような例を稿者が創作し提示した。

〔元歌〕

天地の 分かれし時ゆ 神さびて 高く貴き 駿河なる 布
士の高嶺を 天の原 振り放け見れば 渡る日の 影も隠らひ
照る月の 光も見えず 白雲も 行ききはばかり 時じくそ
雪は降りける 語り継ぎ 言ひ継ぎ行かむ 不尽の高嶺は

（万葉集・卷三・三二七）

〔創作した和歌〕

機上から 見下ろす富士は まぶしくて 雲と一緒に 写メで
パチリ（傍線部は小道具）

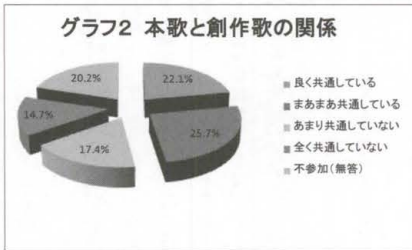
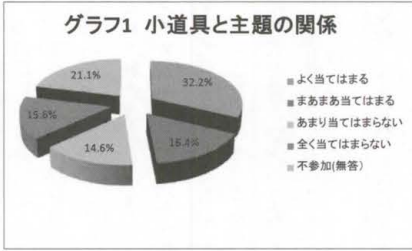
このような例で学習課題・過程を確認させたうえで、創作に取り組ませた。解釈の部分は、元の歌の主題、一次で使ったワークシート、教科書に書かれている出典等を参考にさせた。次に挙げるのは、生徒の作品で、投票の結果上位だったものである。

- ④ 父母が頭かき撫で幸せあれていひし言葉せ忘れかねつる
- ④ 父母が電話のむこう元氣かと問うあの声がわすれられない
- ④ しら露の色は一つをいかにして秋の木の葉をちちにそむらむ
上向けはたくさんの色の紅葉で目を奪われる平和大通り

④ 見たせば花ももみじもなかりけり浦の苦屋の秋の夕暮れ
 ⑤ 見下ろせばすでに葉がない桜の木教室に届く夕陽の温度

四 生徒作品の分析

生徒の創作した和歌について、(1) 小道具は主題によく当てはまっているか (2) 元の歌と創作した和歌は主題が良く共通しているかの二点について分析していった。



分析の前に、授業に参加していない生徒があまりに多いことを反省しなければならぬ。とりあえず席についてノートも取っている

が、創作になると全く手をつけられなかった生徒も数多く存在する。「なんでこんなことせんにゃあいけんのか」と、課題が自分の手に負えないとわかると課題に取り組むことを拒絶し始める生徒もいた。学力の二極化がさまざまな場面でいわれていて、指導者は考える力をどの子にもつけようと、一人一人が考えざるを得ない場面を設定しようと言語活動を仕組んでいるのである。しかし、考える場の設定があっても、一人一人の子どもが、考える場という土俵にあげられる状態を創っておかなければ、学力の低い生徒は、結局考えることをせずに一斉授業の時の置いてけぼり状態と何ら変わらない状態になる。言語活動を仕組んだ時、全体的な手立て以外に、cになるおそれがある生徒にどのようにかわっていくのか、手立てを考え具体的な支援をしていかないと、二極化の拡大再生産が進んでしまうことにもなりかねない。

観点(1)と観点(2)の「全く当てはまらない」「全く共通していない」と判断された生徒については、小道具が思いつかないうちに先に和歌ができてしまい、それ以後推敲する気持ちが全くなくなったタイプ、遊んでいたりと、実際思いつかなくて時間が経ってしまい、慌ててとりあえず元の歌のことは考えず作品を創作したタイプ、結局元の歌を現代語風に直しただけのタイプ、主題のとらえが浅く、解釈がねじれてしまったタイプなどに類別できた。このレベルの生徒たちは「提出することに意義がある」意識レベルであり、指導者もいつのまにか同じレベルに甘んじてしまっているということとをこの分析を通して再確認してしまった。それを打破するためには、やはり指導者が彼らの実態を見て、良い作品にするための粘り

強い指導をすることが必要になってくると考える。

五 半年後の生徒の思い

(一) 場面設定と生徒について

時間の関係で、生徒に感想や自己評価を書かせていなかったのが、生徒が単元や言語活動についてどのような思いをもっているのかがかりがなかった。そこで、中学校を卒業して約四カ月の高校に入学した生徒に会い、話を聞くことにした。初めに依頼したのは、メールのやり取りがあり人間関係の築けているモモ（仮名、以後の生徒名も仮名）である。「稿者が論文を書くため、昨年十一月に実施した和歌の授業について話を聞かせてほしい。できれば四・五名同時に聞きたい。人選については任せるがなるべく記憶力の確かな人がいい。」という内容で依頼した。モモは、担任した生徒で、真面目で学力も比較的高く短時間で課題の把握、解決ができた。英語が一番好きな教科である。当時は、選抜Ⅰに向かって小論文を頑張っていたが、塾には通っていないだったので、せいぜい家庭学習は一時間程度であったようだ。

当日、会場のファミリーストランに現れたのは、同じクラスで現在はそれぞれ別々の高等学校に進学した五人の女子生徒である。モモ以外には、モエコ（語彙が極端に少ないため、理解できないことが多い。日常生活でも友達によく説明してもらっていた。国語のテストも暗記で点を取るタイプである。塾にかなり頼り、毎晩遅くまで勉強していた。）アヤ（点数はそこまでとれないが、物事

を大局的につかむことができない。教科の中では国語は比較的得意なものではないかと思われる。在学中は私語が多く授業で集中していないことが多かったが、三者懇を期に心機一転がんばり始めた。この単元当時は受験に向かって集中していた時期である。）ユミ（几帳面で、シャキシャキと物事に取り組む。国語の力はかなり高い。当時は進学問題で悩んでおり、精神的に不安定だった。）ハルナ（努力家でも好人物。感想やアンケートなども先生のためにたくさん書いてあげると言うような発想で、大量の記述をしてくれるが、的を外していることが多い。当時は塾に通い、毎晩遅くまで勉強していた。範囲の少ない定期テストは良い点がとれるが、実力テストは全く取れない。）というメンバーである。彼女たちに、内容については「和歌」と伝えたが、「短歌のことよね。」（モモのセリフ）「俳句じゃないん？」（先生、和歌って季語いるんかいね？）（ユミのセリフ）と、かなり国語的に力のある生徒のあやふやな発言を聞き、果たして半年前の国語の学習内容を覚えているのかと不安なスタートとなった。さらに、「比較して何？」（モエコのセリフ）という理解度しかないものもいるため、教科書のコピーや創作した和歌のプリントを見せながら、アンケートの言葉の説明も加えながら書いてもらった。本来は、和歌についての座談会形式ができれば最高だなあという思いもあったが、彼女たちが久しぶりに会ったことや場所の雰囲気もあり、授業や言語活動についての深い振り返りまでではできず、アンケートと付箋紙に連想したことを書くことで終わらせた。次にあげたものは、アンケートの項目と、それについての生徒の回答を併記したものである。

(2) アンケートの実際

名前 ()

1 「万葉・古今・新古今」の授業について

① 難しかったところはどのようなところですか。当てはまるものに○、特にそう思うところは◎を付けてください。

- ア 和歌を声に出して読むところ
- ◎ イ それぞれの和歌の意味を理解するところ
- ウ 自分が担当したい和歌を選択するところ
- 現代に当てはめて小道具を考えるところ
- 小道具をいれて五・七・五・七の形式にするところ
- 他の人の和歌の元の歌を考えるところ
- キ よかった和歌を選ぶ(投票)するところ
- ク 相談する人がほとんどいなかったところ

② 楽しかったところはどのようなところですか。当てはまるものに○、特にそう思うところは◎を付けてください。

- ア 和歌を声に出して読むところ
- ◎ イ それぞれの和歌の意味を理解するところ
- ◎ ウ 自分が担当したい和歌を選択するところ
- 現代に当てはめて小道具を考えるところ
- 小道具をいれて五・七・五・七の形式にするところ
- 他の人の和歌の元の歌を考えるところ
- キ よかった和歌を選ぶ(投票)するところ
- ク 相談する人がほとんどいなかったところ

③ 自分に力がついていた(よく考えた)ところはどのようなところですか。当てはまるものに○、特にそう思うところは◎を付けてください。

- ア 和歌を声に出して読むところ
- ◎ イ それぞれの和歌の意味を理解するところ
- ◎ ウ 自分が担当したい和歌を選択するところ
- 現代に当てはめて小道具を考えるところ
- 小道具をいれて五・七・五・七の形式にするところ
- 他の人の和歌の元の歌を考えるところ
- キ よかった和歌を選ぶ(投票)するところ
- ク 相談する人がほとんどいなかったところ

④ この授業についてどのような思い・考えを持ちましたか。

- 少しだけ昔の人になれたような気がしたのしかった。(アヤ)
- 小道具を入れて現代のものをつくるのがとてもむずかしい。(選ばれて)びっくりしたけどうれしかった。小道具を考えるのがたのしかった。考えたかいがあった。(モエコ)
- もともと古典は好きなので、授業は楽しかったです。昔の人と考えが同じところもあったり違うところもあったりで、面白かった。選ばれて思ったことは、はずかしかった(汗)(笑)(ユミ)
- 現代のものにあてはめて作るのが難しかった。五・七・五・七に自分の思いをつめるのは大変だったので昔の人はすごいと思いました。
〔モモ〕
- 昔の愛の伝え方、表現がどんなんであったかよく分かった。(ハルナ)

2 先生が一方的に話したり書いたりしたことを生徒が理解するよ
うな授業と比較して、生徒が言語を話したり書いたり、あるいは聞
いて、または読んで理解する（言語活動といえます）ような授業は
どんな点がよいと考えますか。中学校・高校の授業を踏まえて書い
てください。

- 自分で考えることは自分のためになるからいい（アヤ）
- 先生が一方的に話すほうが考えやすむからいい。（モエコ）
- 生徒の自主性がつく所が良いと思う。理解するためには、先生の話を聞くのも大切だと思うけど、自分たちで考えることも大切だと思う。（ユミ）
- 自分がやらなければならないのでより真剣に楽しく取り組める。一方的だと聞いていない時が多いので自分でやったほうが達成感もある。（モモ）
- 中学校の授業に比べて、高校の授業は進むのがはやいが①（稿者注：「先生が一方的に話したり書いたりしたことを生徒が理解するような授業」のこと、アンケートに番号の書き込みあり）の方が自分にはよく分かる。だが、進むのがはやいから先生の補足説明をノートの端の方に書いておくと授業においていかれさみになる。わからない語句は調べておいていた方がよい。中学は説明してくれたが高校はそれを説明なしでとばしていく場合がある。②（稿者注：「生徒が言語を話したり書いたり、あるいは聞いて、または読んで理解する（言語活動といえます）ような授業」のこと）は、自分の意見をあんまり言ってくれない人がいたときはなかなか進まなくなる②は自分で話す力友達の意見が聞ける（稿者注：ママ）（ハルナ）

六 アンケートの分析

わずか五名のアンケートであるため、信頼性や客観性を問われるとはつきり返答ができない。ただし、現在は稿者と生徒の間が成績をつける・つけられる関係でないこと、本音を言ってもよい間柄であること、五人が稿者の意図した集団でないことなどを考えると、本質に迫るデータではないかと考え、このアンケートを元に稿者の考えをまとめてみることにしたい。

まず、驚いたことは、その単元の様子を生徒たちが実によく記憶しているといくことである。俳句や短歌、和歌の区別があいまいな様子であったので、正直思い出してくるのだろうかと不安になったが、この和歌は誰の歌だとか、小道具が難しかったとか、モエコやユミが最優秀賞だったとか、話しているうちに次々と単元の様子を鮮明に思い出したのである。やはり、INPUTとOUTPUTのある言語活動の効果は非常に大きいと思う。これまでの知識が「指導者側からは伝達、学習者側からは受容するもの」という位置づけだったことに対して、「これからの知識は言語活動を通して生み出されるもの」であるという位置づけを高木（2011）が述べているように、今回学んだことは新しい知識として彼女たちの中に定着したのだと思う。

第二に、稿者の意図した「小道具の設定」「小道具を入れた和歌の創作」の条件設定が、生徒も難しかったり力がついた（よく考えた）学習過程と評価していることも、この単元を実践しての大きな

成果である。やはり、条件をつけることは生徒の思考力の育成につながるかと考える。言語活動の充実を図る場合にはただ漫然と活動させるのではなく、単元で育成すべき力(目標)を明確にした上で、どのような条件を付ければ生徒はしっかり考えざるを得ないか、単元設定時に考えるかが大切なのであろう。つまり、考える場をどのように設定するかが、言語活動の充実の一番のポイントになってくると予想される。一般的に考えてみても、条件があればあるほど、ハードルが高ければ高いほど、我々は考えざるを得ない。このことは、アンケート項目①(難しさ)と項目③(力がついた(よく考えた))はある程度連動していることから導き出せる。ところで、①になくて③に多かったものが和歌の意味の解釈の学習過程である。このことは解釈のレベルを大切にしないと生徒は授業が分かった、自分に力がついたと感じないのではないかと示唆しているのではないか。また、②の項目(楽しさ)はよかった和歌を投票するところに五人全員が◎をつけていた。仲間の作品を味わうところ、交流するところに生徒たちはこのように価値を見出していた。普段時間が足りなくなり、駆け足になると、真つ先に省略してしまう過程でもある。この時間を保証することが生徒の教科における楽しさにつながると再認識し、いかに交流させるかを単元設定の中で十分考えていきたい。交流することで、自分以外の違う立場の考えが存在すること、そしてそれらの考えと自分の考えを交差させる中で自分の意見がより確かになったり新たな視座を得て豊かなものになったりすることを生徒に実感してほしいと願っている。グローバル化の進むこれからの社会の中で、立場や考えの異なる様々

な人々と交流して行かざるをえない将来のことを考えると、できるだけ多様な立場・考えにふれる機会を設定したいと考える。そのためにも、多様な意見が生まれるような学習課題の設定と、多様な意見を知ることが楽しいと思えるような個人・学習集団の育成が不可欠である。

最後に、言語活動そのものについての生徒の意識について考えていきたい。五人中三名が肯定的に、二名は否定的に評価している。三名の生徒は、「自分で考えられるようになる」「自主性がつく」「真剣になれる」「達成感がある」というキーワードで言語活動を評価している。一方、否定的な意見を回答したモエコは「先生が一方的に話すほうが考えんですむからいい。」とやはり言語活動をすることによって考えざるを得ないということを間接的に述べている。(ただし彼女は考えることに価値を置いていない。)もう一人のハルナは先生が説明をたっぶりしてくれる講義形式の授業の方がよくわかるという意見である。言語活動をする(仲間が参加してくれなくて困るのか、それとも待つ時間が耐えられないのか定かではない)が、話さない仲間がいて進まない、と困ると述べていることから、彼女は授業のあり方において進度を重要視していることがうかがえる。ここで、この二人を見て思い出すことは、受験に向けて毎日五〜六時間塾で熱心に勉強していたことである。そのかにもあり彼女たちは志望校に無事合格している。つまり、この成功体験によって、彼女たちの学力観は「勉強＝先生が教えてくれること、試験範囲をくまなく勉強すること、徹底的に覚えること、時間をかけないこと」と形成されているのではなからうか。「考えること」が、「勉

強」の範疇に入っていない生徒たちにとって言語活動はまったく必要のないものとしか映らないであろう。そう考えると、言語活動の充実をめざすためには、まず「考えること」について考えさせることから始める必要があるのかもしれない。

七 おわりに

生徒作品からは、言語活動をしていくときに十分な手立てがなされていないと、学力が低い生徒は全く付いていけず、さらに低位になつていく恐れがあるということが浮き彫りになってきた。このことについては、やはりどの部分でつまずくかという予測をしつかりすること、言語活動をカリキュラムの中に組み込んで計画的・継続的に仕組み、生徒の抵抗感をなくしていくことが大切であると考える。半年後の生徒アンケートからは、言語活動が考えられる力をつけ、学習内容を定着させ、しかも楽しい授業になったと一定の成果があったことも読み取れた。ただし、考える力がどのように付いたかという判断基準についてはこれから具体的に考えていく必要がある。と同時に、言語活動の充実をしていくためには、生徒のもつ「学力観」にもメスを入れざるをえないということも認識できた。生徒たちが十数年かけて作り上げてきた学力観に「考えること」をどのように組み込んでいくか。大きな課題である。

(広島市教育センター)

参考引用文献

- 井沢元彦(1995)『逆説の日本史(3) 言霊編 平安遷都と万葉集の謎』小学館
- 宮地裕(ほか三十二名別記)(平成21年)『国語3』光村図書出版
- 橋本治(1987)『1995』『桃尻語訳枕草子上・中・下』河出書房新社
- 鯨岡峻(2007)『エピソード記述入門 実践と質的研究のために』東京大学出版会
- 中央教育審議会(2008年1月17日)『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について(答申)』
- 難波博孝・福山市立湯田小学校(2007)『HSA型読解力にも対応できるイメージの形成と共有によるコミュニケーションの授業づくり』明治図書
- 俵万智・与謝野晶子(1998)『チョコレート語訳みだれ髪』河出書房新社
- 文部科学省(平成20年9月)『中学校学習指導要領解説国語編』東洋館出版社
- 高木展郎・直山木綿子(2011)『言語活動の充実に向けて』『初等教育資料 2011年7月号 (No.875)』pp.2-5.
- i 「考える力＝思考力」と定義し、本稿では以後「考える力」と表現していく。